

新法人発足によせて

九州大学名誉教授 北九州市立大学特任教授 松藤 泰典*

九州環境管理協会は1971年に公害防止に関する公益法人としての認可を得られて以来40年に亘る取り組みを続けてこられました。

その間、1999年、ブダペストで開催された世界科学者会議は、人類にとって有益な知識のための科学、平和構築のための科学、持続的発展のための科学といった目的を持った科学という概念を定義しこれを総称して社会のための科学と呼びました。価値中立であった科学がこのとき価値目的を持ち、結果、倫理性を帯びます。社会のための科学は、規範としては予防倫理および世代間倫理の形で具体化され、責任の倫理と総称されるようになります。環境管理というすぐれた上位概念によってデザインされた九州環境管理協会は誠に時宜を得たものでありました。

この度、公益法人制度改革に伴って2012年度から一般財団法人として新たに発足されましたが、発足の前年、2011年3月11日に発生した東日本大震災は、マグニチュード9.0という我が国観測史上最大規模の地震を発端として、三陸海岸で最大波高が10~15mに達する津波を発生し、更に、この地震と津波によって東京電力福島原子力発電所群の大量の放射性物質漏洩という重大な原子力事故を惹起するに至りました。

震災特需とでもいうべき状況が生じていますが、新法人におかれては東日本大震災後の復旧・復興に向けた事業の展開に際して、協会としての業務等を通して、できうる限りの支援を講じていかれることを期待します。同時に中長期的には、この大震災で顕在化した想定外の事象に対する環境管理への対応

を視野に入れておく必要が生じるかも知れません。

想定外について、酒井泰弘滋賀大学名誉教授は「想定外というのは彼らの設計の目標外であったというだけのことです。今回の原発事故は、科学者から見たら当然考えられる範囲です。コスト面から考えた設計目標を超えていたと言うべきです」といいます(日経新聞2012.1.24)。これを可視化すると、コストを降順にプロットした棒グラフとその累積構成比を表す折れ線グラフを組み合わせた複合グラフで、ヴィルフレド・パレートに因んで名付けられたパレート図を想起します。パレート図には確率分布の一つであるベキ分布のイメージがあります。これを用いて、縦軸をコスト、横軸をリスク/事故率とすれば、計量可能なリスクの範囲がクライシスマネジメントを含むリスクマネジメントの対象で、何重もの対策を施すことで事故率がゼロに近くなる領域は、実は、計量化できない不確実性の、そして、コストで判断してはいけない領域であると理解されます。

福島原発事故に関して言えば、前もって想定できないミスや事故が不可避だけに本来計量化できないものであり、そのような状況における行為に関する意志決定の選択基準がないときには、それでも行為を決定する覚悟、すなわち、エグゼクティブデザインが必要であることを顕在化して見せたように思われます。

管理との関連としてマネジメントの視点でエグゼクティブデザインを解釈すると、考慮すべき要因が多岐に亘って輻輳しており、クライシスマネジメントに入れないうちにマネジメントが行える水準ま

* 一般財団法人 九州環境管理協会 評議員会 会長

で要因を瞬時に取捨する意志決定であるといえるでしょう。

短期的には合理的な選択かも知れないが、長期的には制御不可能な不確実性を生む恐れがあるような状況も含めた環境管理は、たとえば、想定外環境管理としてのテーマ設定が必要になります。

東日本大震災から復興して日本が存在感と自信を回復するとき、産業技術とその品質、そして環境管

理は重要な基盤となります。産官学の更なる支援の下、具体的には、排水管理及び処理、生態系や環境放射能管理、環境アセスメントとそれに続くモニタリング、環境計画・設計さらに地球温暖化防止や環境の科学や技術の啓発普及の業務を遂行されなければなりません。ここに申し上げたことも含めて、従前にも増して当協会の役割が必要とされます。向後の更なる発展と飛躍をご期待申し上げます。



ハクセンシオマネキ

【環境省絶滅危惧Ⅱ類】

雄の白いハサミを振る姿が、白い扇子で潮を招くように見える。